

# 京都浄福寺

## — 歴史を訪ねる旅 (7) —

### 下土橋 渡



著者の住む鹿兒島県さつま町内にある中津川地区の弓之尾集落の男性たちは惚れ惚れするほど手踊りが上手で、結婚披露宴や各種イベントなどからお呼びがかかるほどです。

同集落には、無資格社ながら鳥居や瓦に島津家の定紋である「丸に十の字」の家紋をあしらった大石神社という小さな神社があります。この神社の九月の例祭には、約四〇〇年の歴史を有するとされる「金吾さあ踊り」(さあは様の意味)という踊りが毎年奉納されていて、弓之尾集落の男性たちの手踊りはその伝統に培われたものなのです。

中津川と同じ旧薩摩町内の求名に生まれ育った著者の、今は亡き母が弓之尾集落の出身だったことがあって、幼いころ手を引かれ、片道一〇数キロの道のりを歩いて踊りを見に連れていかれたことをうつつすら覚えていません。その頃は、神社を一周ぐるりと囲む松林の木もまだ小さく、木々の間から中津川小学校やその周辺の田園風景が見下ろせたものですが、今はうつそうとした松林になっていて、見えるのは、見上げて見える、松林で丸く切り取られた空だけです。その大石神社に祀られ、今でも「金吾さあ」と呼び親しまれている人が誰で、どういう人だったのかを知るに至ったのは恥ずかしいながら五〇という歳を超えてからのことでした。

### 一、北薩摩秀吉の道

薩摩郡さつま町(旧宮之城町) 船木の自宅の数百メートル南を「北薩摩秀吉の道」とい

う教育委員会の標柱の立った道が東西に通っています。道は、すぐ東で急峻な山裾にぶち当たり、あとは尾根へ続く険しい山道になっています。

九州征伐において、天正十五年（一五八七年）五月、川内の泰平寺（現薩摩川内市）で島津義久の帰順を見届けた豊臣秀吉は、帰路ここ祁答院領を通過します。しかし、領主島津歳久は病気を理由に謁見に出て来ないばかりか、家臣に命じて秀吉軍を巧みに陰相な山道に誘い入れ、秀吉の駕籠に矢を放たせたのです。秀吉は別の駕籠に乗っていて難を逃れ、鶴田（現さつま町鶴田）の梅君ヶ城に入城。そこに駆けつけて来た次兄義弘から降伏の意を受けます。

その後も秀吉への帰順を拒否し続けた歳久でしたが、九州征伐から五年後の天正二〇年（一五九二年）六月、島津氏家臣梅北国兼

が熊本の佐敷で起こした謀叛（梅北一揆）に歳久の家臣が多く参加していたことが知れるに至り、秀吉の怒りは頂点に達します。同年七月、秀吉の命によって長兄義久の追討を受け、歳久は竜ヶ水（鹿児島市吉野町）に自害して果てました。享年五十六。

## 二、島津歳久

島津歳久は、天文六年（一五三七年）、伊作（現鹿児島県日置市吹上町）の亀丸城に生まれます。父は島津宗家の養子になって十五代守護職を継いだ島津貴久公。母は入来院重聡の娘の雪窓夫人。島津氏中興の祖といわれる祖父の忠良（日新斎）から「始終の利害を察するの智計並びなく」という評価をされ、若年より父の貴久や兄の義久、義弘を助けて数々の合戦で活躍しました。

秀吉の九州征伐の際、家中が抗戦へ傾く中で秀吉を「農民から体一つで身を興したから



御石山 JR 日豊本線・重富駅の約 300mのところにある。歳久の遺体はここで清められ、首は肥前名護屋城の秀吉のもとに届けられ、胴体は帖佐の総禅寺に葬られた。2008 年 7 月撮影。



総禅寺跡の歳久墓所跡（始良市帖佐） 胴体が掘り起こされて平松神社に改葬されるまでの二百数十年間埋葬されていた場所。2008 年 7 月撮影。

には只者ではない」と評価して、四兄弟中ただ一人上方との和平を唱えたといわれます。しかし、秀吉と戦うことになると、今度は徹底抗戦を主張、義久・義弘が降伏後も最後まで抵抗しました。

自害後、歳久の胴体は帖佐（鹿児島県始良市）の総禅寺に埋葬され、一方、首は肥前名護屋（佐賀県唐津市）にいた秀吉のもとに届けられ、首実験の後さらに京都に送られて、一条戻橋にさらされました。ところが、ちょうどその時期に、歳久の従兄弟に当たる島津忠長という人が京都に来ていて、大徳寺の玉仲和尚と図って、市来家家臣にそのさらし首を盗みとらせ、浄福寺に埋葬したのです。

それから二八〇年の永きにわたって首は浄福寺に埋葬されますが、明治五年（一八七二年）、歳久の末裔に当たる日置島津家十四代島津久明が京都に上り、首を掘り起こし鹿児島

島に持ち帰り、一方、帖佐の総禅寺に埋葬してあった胴体も掘り起こし、一体にして、竜ヶ水の平松神社（心岳寺）に改葬しました。

実に二八〇年を経て、首と胴体が一緒に埋葬される状態に至ったわけですが、さらに大正の終わりか昭和の初め頃に、日置島津家の菩提寺だった大乘寺跡（現日置市日吉町）に改葬され、現在に至っています（島津金吾歳久公四百年祭志、島津修久著「悲劇の武将・島津金吾歳久」を参考）。

### 三、京都浄福寺

京都に行ったら是非、浄福寺を訪ねたいと思っていたところ、二〇〇八年九月、妻と一緒に京都に行く機会がありました。妻が同伴のときは、ホテルの予約はもっぱら妻任せ。

妻が予約したのは都合のいいことに、堀川通り二条城前の京都全日空ホテルでした。ホテルを出て堀川通りを一キロ足らず北上すれば

一条戻橋です。歩いて行ける距離なので、チエックアウトまでの時間を利用して一人で出かけました。

一条戻橋の東は、数百メートルで京都御所の敷地。その北隣には同志社大学今出川キャンパスがありますが、島津歳久の首が一条戻橋にさらされた頃の浄福寺はそのあたりにあったそうですから、なるほど首を盗んで走り去り、埋葬するのに都合が良かっただろうと思われます。浄福寺はその後、一条戻橋から六、七百キロ西の現在の場所に移転しました。

現在の浄福寺は、境内に幼稚園を有するほどの広さなのに、観光寺ではないので、静かな佇まいのなかに本来の京都らしい寺の雰囲気を感じられます。全体に朱が塗られた門を有することから赤門寺と呼ばれ親しまれ、織物を核とする西陣の町屋が軒を連ねる門前の通りは浄福寺通りと呼ばれています。

広い境内を隈なく歩き回っても歳久に由来のあるらしいものは何も見当たらないので、社務所に尋ねてみることにしました。訪いを入れると年配のご婦人が出て来られ、このお寺は何代も住職が替わり、寺歴の記録もないので分かりませんとおっしゃいます。島津歳久の名すらご存知ない様子でした。ただ、口伝えですが、入口の柱に残っている刀傷は、幕末にこの寺を宿舎とした薩摩藩の藩士たちが付けたものだと言っておりまして話して下さいました。お礼を述べて辞するとき柱を見てみると、なるほど刀傷がありました。

ほとんど知られていないと思いますが、司馬遼太郎氏の短編に、浄福寺の薩摩藩士のことを書いた「薩摩浄福寺党」というのがあります。ちようと、薩摩藩邸の奥座敷で、坂本龍馬仲介のもと、薩摩側の代表、小松带刀、西郷隆盛、大久保利通と、長州側の代表、桂



島津歳久の首が埋葬された浄福寺（移転後）＝京都市上京区。朱が塗られた門を有することから赤門寺と呼ばれ親しまれている。



幕末に薩摩藩士が付けたという浄福寺本堂の柱の刀傷

小五郎、品川弥二郎が、薩長連合の密談を行ってゐる頃の、肝付又助という薩摩藩士のぼつけもん（向こう見ず）のことを書いた短編です。短編には次のようにあります。

―薩摩藩では、錦小路（現在・京都大丸裏）にふるくから藩邸があつたのだが、これでは足りないため、現在の同志社大学のあたりに二本松藩邸を造営し、それでもまだ不足があつたので、西陣の浄福寺の客殿、本坊などが借りあげられたのである。この浄福寺を寮としてゐるのは二十人ばかりの下級藩士で、年も若く、妙に乱暴者ばかりがあつまつた。自然たれがいうともなく、浄福寺党という異名で呼ばれた。―

安政五年（一八五八年）の安政の大獄で追いつめられた西郷隆盛は、僧月照と一緒に、鹿児島湾で小舟から身を投げますが、そのとき西郷は月照に歳久の話をし、自害の地に

建てられた心岳寺の方に一拝を求めた上で飛び込んだそうです。また、往時の祥月命日には、歳久の御遺徳と壮烈なる最後を偲んで、鹿児島三大詣りの一つとして、「心岳寺詣り」が盛大に行なわれたといわれます。このように歳久は没後も永く、薩摩武士や薩摩の人々に深く崇敬されてきた人でした。

司馬遼太郎氏が島津歳久のことを知っていたのか知らなかったのか、短編で歳久のことは何も触れられていませんが、浄福寺党は浄福寺が歳久ゆかりのお寺であることは当然知っていたはずで、浄福寺に格別の思い入れを持っていたに違いありません。歴史の因縁の妙というものを感じながら、寺を後にした京都浄福寺の訪問でした。

#### 四、金吾とあ踊り

島津歳久は、天正八年（一五八〇年）から五十六歳で死去するまでの十二年間を祇答院





金吾さあ（島津歳久）を祀る大石神社。無資格社ながら丸に十の字の島津家家紋があしらわれています。 2008年8月撮影。



「金吾さあ踊り」の一つ「鷹刺し踊り」（さつま町中津川弓之尾集落の皆さん） 2005年9月撮影。





「鷹刺し踊り」の一コマ。約400年の伝統に培われた「金吾さあ踊り」の踊り手は惚れ惚れするほど上手です。 2008年9月撮影

十二郷（現在のさつま町の佐志、湯田、時吉、虎居、平川、船木、久富木、鶴田、紫尾、柏原、求名、中津川）の領主として、虎居城（現在のさつま町宮之城）で過ごしました。

その役職名が唐名で金吾といわれていたことから、地元では金吾さあと呼ばれ親しまれてきました。歳久公は自害のとき、「風疾」を患っていて刀が握れず、「妊婦が産に臨むときの苦しみはこのようなものであろうか」と石をもって割腹しようとして、家臣に介錯させたと伝えられています。このような言い伝えから、金吾さあを祀るさつま町中津川の大石神社は、卵ほどの石を奉納して安産を祈願する妊婦が多く、武の神とともにお産の神として崇拜させてきました。その大石神社では、現在でも毎年九月、「金吾さあ踊り」が盛大に行われ、金吾様の遺徳を偲んでいます。

（元九州職業能力開発大学教授）